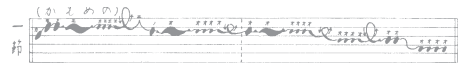


やんさノエ

会報

2006 No.5



発行 江差追分会

2006.1.20

北海道松山郡江差町中歌町193-3

TEL 0139-52-5555

FAX 0139-52-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>



一年を振り返って

会長 濱谷一治

新春を迎え、江差にもまた寒さが身に厳しさを伝えるたば風の吹く季節が近づいております。

日本各地を見ましても、昨年末から猛威をふるっております大雪も深刻な問題となっており、現代社会における環境問題等が見え隠れしている気さえ感じられます。

さて、昨年の追分会を振り返ってみますと無事第四十三回の全国大会並びに第九回の熟年・少年全国大会を終え、一般の部では実に十年ぶりとなる男性優勝者の誕生、そして熟年・少年の各部でも男性が優勝し、全クラス男性優勝という偉業が成し遂げられました。

また、これからの江差追分会がどうあるべきかを検討すべく「運営検討委員会」を立ち上げ、組織強化に向けあらゆる角度から委員の皆さんに検討をいただいております。これにつきましては、皆さんにも本誌により途中経過を報告させていただきます。

昨年七月に開催された理事会において、地区選抜大会については、平成十八年度から、各地区運営協議会が主体的に運営することで決定されており、ますます地区役員をはじめとする会員の皆さんのご理解とご協力が必要となっております。

まだまだ寒い時期は続きそうですが、江差追分を存分に楽しみながら唄っていただき、「心」の中から温まってほしいものです。

第四十三回江差追分全国大会

十年目の男性優勝 一般 播磨孝雄

熟年 杉浦幸雄 少年 大沢尚悟

昭和三十八年秋の第一回大会以来、四十三回目を迎えた江差追分全国大会は、それぞれ九回目を数える江差追分熟年大会・同少年大会と共に、九月十六日から十八日までの三日間、江差町文化会館で開かれた。

舞台正面に渦巻く波の中、くつきりと浮かび上がった二羽の比翼の鴉を背景に、約四百名の出場者が三日間にわたって「おのれの一切をぶつ



つけて唄う」江差追分の競演が繰り広げられた。

男女の唄い手の力が伯仲していた今大会では、三十三回大会の王藤正藏師以来、十年ぶりに男性の唄い手が優勝を飾るなど話題も多く、盛り上がった雰囲気の中で全日程を終えることができた。

注目の一般の部の優勝者は、播磨孝雄氏（六二才、函館澄声会支部・崎野澄師門下）で、氏は平成八年の第三十四回大会以来、本大会の十位以内に六回入賞という輝かしい実績を持つベテランである。長年、造船所で船の整備をする傍ら鍛えたというその情感豊かな追分は、いつしか他の追隨を許さぬ領域にまで達していたわけである。

なお、今回の優勝は、本人にとっては全く予想外であつたらしく、急に呼出されて普段着のまま舞台上上がる際にも、終始目にハンカチを当てて感涙にむせんでいる姿が印象的であつた。

一方、熟年の部優勝の栄冠は、森町在住の漁業杉浦幸雄氏（六八才、八雲支部所属）の頭上に輝いた。浜風に

鍛えられた確かな年輪を感じさせるその唄声には、江差追分本来の魅力である豊かな北海情緒が溢れていた。

さらに江差追分の将来を担う少年の部では、良く伸びるキーの高い美声の上に、基本に忠実な節回しを身につけた若小牧市在住の大沢尚悟君（中一、静内支部所属）が優勝した。青少年の関心を引くようないろいろな娯楽が身の回りに山ほどある中で、日夜苦しい練習に励む、これら前途有為な少年の未来に大いに期待したいものである。

三日間の競演を終え、審査結果の発表に先だつて恒例のアトラクションが行われた。前年度優勝者（熟年・成田誠氏、少年・木内絵理さん）の模範演唱をはじめとして、一般の部の松田美和子さんによる追分踊付き一本通しの江差追分、過年度優勝者の大川陽子・細川澄美枝、菊地勲・嵯峨幸男ら各師による華麗な、あるいは情感たっぷりの掛合いの追分などの見事な芸に、一昨年、北海道遺産にも指定された江差追分の魅力を改めて心ゆくまで堪能した人々は、深い満足感を覚えながら家路についたようである。

最後に本大会の締め括りとして藤田信審査室長（NHK函館放送局放送部長）が行った講評と、同氏により示された審査規程の内容の一部を要約して次に紹介してみよう。

藤田氏は、江差追分は何よりも先ず「浪の唄である」と、この唄の性格付けをされた。その上で歌唱技術の問題に入り、一般に出だしから中頃まで単調に推移しがちで、五節を乗り越えると安心して後半部の唄が雑になる傾向があることを指摘された。また、五節に声を使い過ぎてバランスを崩したり、本スクリなどの基本的な節回しが出来ていない例があること。さらに唄い手と伴奏の間の音程にズレがあったり、尺八、唄、ソイ掛けのタイミングが合わない、いわば「浪に乗れなかった」唄が多かった事実を挙げ、今後さらなる研鑽が必要、という大方の審査員の意見を表明された。

なお、審査に関する部分では近年の大会では、おおむね六十点から九十点位の範囲で唄い手の優劣が判定される場合が多いが、その際の審査規程として、先ず、唄い出しや唄の途中での絶句、音程ハズレ、歌詞の間違い、七節ある各句の途中切れ（ただし、子供は二回までは可）、それぞれマイナス五十点として採点される。歌唱時間の長さの適否については個々の判定によるが、伴奏の乱れはその程度によっては減点の対象になることもある。伴奏と唄い手、ソイ掛けという三者の呼吸は必ずきちんと合っていないければならないので、注意が肝心である。以上、当日会場で筆者が聞き取るこ

とのできた審査室長の講評と審査内容部分の要旨であるが、世代を越えて追分の縁に繋がる我々のさらなる研鑽をうながす内容であり、積極的に受け止めて、「万人和楽」の唄の輪を目指す日々の糧にして行きたいものである。

一般の部 入賞者ほか表彰者
 熟年の部 入賞者ほか表彰者
 (取材・館 和夫)

第四十三回 江差追分全国大会入賞者

- 準優勝 間島 秀格 (長沼支部)
 三位 川俣 明彦 (東京北陽会支部)
 四位 山本 康子 (陽声会支部)
 五位 間島 正晴 (札幌白石支部)
 六位 福士 優子 (千歳支部)
 七位 大沢 理絵 (静内支部)
 八位 安澤 望 (和春会支部)
 九位 井上さつき (江友会支部)
 十位 寺島 絵美 (水堀愛好会支部)

第九回 江差追分熟年全国大会入賞者

- 準優勝 鈴木テル子 (陽声会支部)
 三位 細木 利良 (大平原支部)
 四位 田中 義昭 (札幌白石支部)
 五位 小林 芳春 (涛声会支部)
 六位 舟山 マリ (札幌西支部)
 七位 菅原 圭一 (札幌東白石支部)



熟年優勝 杉浦幸雄さん

- 八位 佐藤 修三 (秋田中央会支部)
 九位 田中 光男 (大阪なにわ支部)
 十位 藤田 礼子 (函館声徳会支部)
 審査員特別賞 会田 郁子 (ブラジル支部)

ひと

第43回江差追分全国大会で日本一になった

はりま 播磨

たかお 孝雄さん

思いが込み上げ涙で声を詰まらせたが、会場を埋めた追分ファンから大きな声援とねぎらいの言葉が贈られた。

松山管内江差町で十八日開かれた江差追分全国大会決勝会。追分に取り組み始めて三十五年。ついに日本一に上り詰めた。男性の優勝は十年ぶりのことだ。審査終了後の歌声披露では、万感の



苦節35年 涙の栄冠

審査員の一人は「過去、個人的な歌声はまさにのうまい人の歌い方を単にまねするのではなく、豊富な練習で培った、人なまらせたが、会場を埋めた追分ファンから大きな声援とねぎらいの言葉が贈られた。」

審査員の一人は「過去、個人的な歌声はまさにのうまい人の歌い方を単にまねするのではなく、豊富な練習で培った、人なまらせたが、会場を埋めた追分ファンから大きな声援とねぎらいの言葉が贈られた。」

めぐり、二十歳の時に追分を始めた。四年後、初周回の温かい支えがあり、歌い続けていくことができた。

「夢ってあきらめなければ、この年になっても実現できるんですね。今はどこにかうれしい」

函館市で妻恵美子さんと二人暮らし。定年退職後も毎日好きな民謡の日本一にはなかなか届かず、一緒に追分を練習してきた。

造船所で船のエンジン(天)と二人暮らし。定年退職後も毎日好きな民謡の日本一にはなかなか届かず、一緒に追分を練習してきた。

願の日本一にはなかなか届かず、一緒に追分を練習してきた。

(中島 威)

第九回 江差追分少年全国大会入賞者

- 準優勝 川畑 貴寛 (和春会支部)
 三位 木本 朱夏 (苦小牧観昇会支部)
 四位 榎林 佳世 (札幌南支部)
 五位 井上 奈菜 (網走声友会支部)
 六位 福田 光 (厚沢部美和支部)
 七位 橋爪絵梨香 (苦小牧観昇会支部)
 八位 三谷 葵 (八雲支部)
 九位 長谷川有沙 (水堀愛好会支部)
 十位 赤石 聖実 (声友会支部)



少年優勝 大沼尚悟君

- 審査員奨励賞 藤谷 優美 (秋田王藤会支部)
 金村 萌子 (天北支部)
 高橋 紗里 (千歳支部)
 遠藤 由梨 (十勝大雪支部)
 田村つくし (かもめ会支部)

あい 亘る 江差追分 …… 岩淵啓介

朝刊夕刊あわせ二百万部近く発行している北海道新聞の朝刊第二社会面に、コラム「朝の食卓」がある。新聞社が選考し、道内各地のボン・サンスの持ち主で文章が書ける人に依頼し、執筆してもらっている。

ここに、札幌市に住む映画監督・吉尾孝紀（よしお・たかのり）さんが、江差追分の特質について、優れた一文「えええええ」を書いている（2005年10月16日付）。

「今まで民謡とほとんど接点なかったが、取材で江差追分全国大会に行った。

かもめの鳴く音にふと目を覚まし
あれが蝦夷地の山かいな

このわずかな歌詞を七文節に分け七息で歌う。およそ二分半の本唄の歌唱中、「えええええ」とか「おおおお」と言っている瞬間が大半だ」

この「ええええ」「おおお」とは、私（岩淵）が『ヤンサノエ』（2004年2月）に書いた「母音を聴く江差追分」と同様の趣旨であった。

また吉尾さんは言う。

「この歌は、ラヴェルの『ボレロ』や、

バリ島の音楽のように、同じ節回しを何度聞いても不思議と飽きない。そして七十歳が歌う追分、七歳が歌う追分、それぞれに味がある。歌唱法にしっかりとしたフォーマットがあるからこそ、歌い手の個性や人柄がにじみ出るのだ」

「フォーマット」（形式設定）とは何か。2005年9月の第四十三回江差追分全国大会プログラムの巻頭の「主催者あいさつ」に言う。

「やがて、標準曲譜がつくられました。歌唱の技法を示す、デダシ、セツド、モミ、本スクリ、スクイ、トメなどの譜語（術語）と曲譜上の位置も定められました」

「この正調の基準があるため、今日のごとき大規模の江差追分全国大会が実施できるのだともいえます」

「フォーマット」とは「正調の基準」に等しい。

吉尾さん、いわく。「恐るべし、江差追分」

「母音を聴く」ことについて、もう少し考えてみよう。

最近（2005年夏ごろ）日本テ

レビ系のテレビ番組『世界一受けたい授業』に出演して人気者になった黒川伊保子さんは著書『怪獣の名はなぜガグゲゴなのか』（新潮新書、2004年7月）に書いている。

「五十音がすべて母音で終わる日本語はもちろん最たる開音節語だ」

「私は、日本語を特別に母音語と呼んでいる。母音語に分類される言語は、私の知る限りでは日本語だけ」

黒川さんに影響している先行の学者に聴覚言語研究の角田忠信先生がいる。すでに常識になった大脳の働きの区別があるという「左脳」「右脳」の考え方の元祖である。

著書『日本人の脳 脳の働きと東西文化』（大修館書店、1978年2月）は画期的反響を呼んだ。

角田先生は、音楽の起源について「母音を引き伸ばすことによって、会話から歌が分離した」という。

「カモメ」を「か・も・め」といい、さらに「か、も、めエエエ」と発声するところから歌になった。

日本語では普遍的現象の「母音」が、江差追分では、ことばの意味を超えて、「左脳」から「右脳」に亘って、「音楽」となるのであった。

文化庁江差追分で

「伝統文化こども教室」認定

旭川忠和中学校で

佐々木洋子支部長



旭川忠和中学校では、佐々木洋子支部長（江差追分旭川支部）の指導で、五年前から江差追分を二年生の教科に取入れて来たが、本年五月二十五日、文化庁委嘱（財）伝統文化活性化協会（平山郁夫会長）「伝統文化こども教室」に認定された。

「江差追分は人生の唄、心の癒す唄、平和の唄など生徒や学校にも関心が高まっており、追分文化の普及に役立てたい」と佐々木支部長は意欲を語っている。

懐古・SPレコードを聞きながら(五)

江差追分を愛した成田雲竹師：高田 裕



成田雲竹師

再就職の岩見沢警察勤務時代には、佐々木冬玉より江差追分を習得し、札幌勤務時代(大正十一年)には「冬玉派雲竹流追分道場」を開設する。

津軽民謡を再興発展させた成田雲竹(本名・武蔵、明治二十一年一月十五日生)昭和四九年五月二二日没、西津軽郡森田村大字森田字月見野出身)もまた「江差追分」をこよなく愛し、伝承した一人であった。

彼は若いころ、木場人夫、機関士見習い、郵便局電信工夫など職を変え、二一歳(明治四二年)で青森警察署に奉職するが、その頃の火災予防講演会では制服帯剣のまま『雨は天から涙は眼から、火事はその日の油断から』と(へうた)をうたって人集めをしたエピソードの持ち主。その後いったん辞職し、三〇歳(大正七年)で来道する。

その後(大正十三年)、郷里・青森に戻り生涯を民謡一筋に没頭し、民謡界初の勲五等瑞宝賞を受けている。〈追分〉の高弟では成田取玉(本名・誠)が有名であったが、当初民謡に反対していた賢妻・よね(芸名・北海米子)も追分の虜(とら)になってレコーディングしたほどである。

津軽三大民謡「じよんがら・よされ・小原」など当時ボサマ、ホイドの(へうた)と嘲笑(ちやうしやう)されていた時代に、東北、関東、関西はもとより南洋諸島、台湾、中国、朝鮮のはてまで民謡普及行脚の旅は想像を絶する。それでヒントとなった新民謡の「ワイハ節」や「リング節」は、いまや名曲となって広

く愛唱されている。

晩年は津軽三味線奏者・高橋竹山(本名・定蔵)とのコンビで一層名声をえたが、尺八(たけ)もの「津軽山唄」も得意としていた。この山唄は、菅江真澄の「ひなの一曲」では「津刈の十五七ぶし」として採録されていて、岩木山を境に「東通り・西通り」の曲調がある。かつては「東通り」を古調とし、それは船唄から転化した説もあり(追分)につながるという。ちなみに、山唄の高弟では成田小雲竹(こぐんちく)こと鳴沢勘次郎(本名・神勘次郎)も晩年、北海道で活躍したことを知っている人は、もう少ない。

平成二年九月の世界追分祭では、実際にこの山唄と追分のつながりを検証してくれた。悲しく、切ない話をうたった韓国北部地方の(民謡)がまさしく、山唄であり追分であった。精妙で気高く美しい音色は、大阪堺を出達した北前船が寄港地の(へうた)を積んで、苦勞をしながらなんとか津軽に立ちより、蝦夷北海洋江差にいたるまでの様相であった。これを聞きながら、江差追分は何層にも重ねられてきた歴史があり、津軽山唄も、もう一つの源流であると思っ

のは、私だけだろうか。

成田雲竹が監修した『唄の玉手箱・青森県民謡集』(昭和三十一年)では、彼自身、民謡は自然を尊ぶ、自然に唄う：自然性を失わぬところにその良さがあるのであって、したがって不自然な技巧、不自然な発声をしていようにしなければいけない」と言っている。その通り。自然を知ることとは、(民謡)の基本だろう。

ふと気がつけば、成田雲竹師も自然に還って三〇数年、彼が作ったむかしの(追分)を紹介したい。

『追分節』 成田雲竹・作詞

へいろはにほいどちりぬるを

諸行無情

わがよたれぞつれならむ

是生滅法

うゐのおくやまけふこえて

寂滅為楽

あさきゆめみしゑいもせず

生滅々已

南無阿彌陀佛

南無歸命頂来

彌陀の浄土へ行く道ひとつ

舎婆の歩みも迷わずに

江差追分会の自立に向けて

運営検討委員会意見

先の「ヤンサノエ」でもお知らせ致しましたが、追分会では、将来の江差追分会を見据えた「運営検討委員会」を設置し、幅広い見地から、各種の議論を行っていくことにしました。

十一月二日に第一回の委員会が開催され、委員長に坂本勇氏（現江差追分会副会長）を選出し、今後のスケジュールや、何を議題にしていくかなどを協議しました。



第一回は特別なテーマを決めず、配布した資料の説明後、各自の追分への思いや、江差追分会の将来像などについて、活発な意見交換がなされた後、今後の会の進め方として二回目以降は①財政問題②組織問題③指導・後継者育成問題の三点に絞って議論を深める事とし、会議を終了しました。

続いて、十二月三日に開催された第二回検討委員会では、前回の確認のとおり財政問題について協議しました。

北海道を取り巻く厳しい経済状況を反映して、町財政も非常に厳しい状態になっています。

また、追分会も会員数の伸び悩みや高齢化など、財政的に明るい状態に有るとは決して言えません。

委員会では、まず現状の歳入・歳出の見直し、例えば収入に対して支出が非常に大きい江差追分全国大会の収支バランスの改善や、地区大会等での審査員の効率的配置、また、

収入増のための各種方策などが議論されました。

更に、将来的な面を見据えて、追分会館も含んだ経営、支援団体の構築などについても触れています。

もちろん、現状の「江差追分会」の各種事業を後退させることがないのが前提になるため、今まで以上に財政の課題について追分会でも十分精査をしていかなければならない問題だと言えます。

続いて第二回の検討委員会は年が明けた一月十五日に組織問題を議題として開催されました。

組織のあり方については、現状の組織ではこれ以上の発展は難しいなどの厳しい意見の中、どのような形態、どのような構成がいいのかなども話題になり、将来的な方向性としての法人化や、指導・育成部門とは別の「経営」を重点的に考えるなんらかの組織の必要性などについてが主な論点でした。

もちろん法人化や別組織と簡単に言ってもそれぞれに課題を含むものであり、今後も引き続き内容について検討をしていかなければなりません

んが、確かに組織の議論については、将来的にも大きな課題といえます。

今後、二月十九日に第四回の検討委員会を開催し、後継者や指導者育成、会員増への取り組みなどについてを協議し、最終は三月に第五回目の検討委員会を開催し、今までに出た意見の纏めを行ったうえで、追分会会長への答申内容を議論する予定です。

また、答申された内容については四月に開催される理事会や総会の場でお知らせする予定です。追分会でも提案された内容について議論を深めていくことと致します。

運営検討委員会メンバー

- 委員長 坂本 勇
- 委員 長谷川 富夫
- 委員 熊野 正宏
- 委員 多田 義和
- 委員 近江 誠之
- 委員 松村 隆
- 委員 浅沼 和子
- 委員 辻 正勝
- 委員 小田原 博子
- 委員 菅原 克博

（取材：江差追分会事務局）

平成十七年度 北海道文化賞
第五十九回 北海道新聞文化賞

ダブル受賞に輝く…青坂 満 上席師匠



は最も権威のある受賞で、しかもダブルで同一人が受賞するのは極めて稀れである。

北海道文化賞は青坂師のほか作家の小檜山博氏（六八）、彫刻家米坂英範氏（七一）の三人、北海道新聞文化賞は社会部門で青坂師、学術部門は遺伝子治療を開拓した医師崎山幸雄氏（六三）、経済部門は「豊かな住い」で社会貢献した家具販売「ニトリ」の各氏が受賞。

江差追分界の第一人者といわれ、今も追分会師匠会長の現役で追分の指導普及にあたっている青坂満上席師匠（七三）が、本年北海道文化賞と北海道新聞文化賞のダブル受賞に輝いた。去る十一月四日と八日札幌市で受賞式が行われた。この二つの文化賞は、北海道の芸術文化の向上に先駆的な活動で貢献した個人又は団体に贈られる賞であるが、何れも道内で

青坂師は四歳の子どものころから漁師たちの唄う追分節に心惹かれ、十六歳から初代近江八声師に師事し、昭和四十三年第六回全国大会で優勝、以来追分の本質を追求修練の末、「潮の匂う青坂節」といわれる独自の境地を開き、全国のファンを魅了した。昭和五十七年追分会館のオープンで専任指導員で来館者に追分を伝え、昭和六十一年には復元北前船辰悦丸の船頭役で、日本海大回航を果し、寄港地で追分を披露して普及に貢献された。

「北国の厳しい風土の中で、這いつく

ばってでも生きようとする先祖の気概、人間の喜怒哀楽、海の激しさ、穏やかさ。すべての要素が追分に唄い込まれている。そういう追分の情緒を大切に、これからも唄ってゆきたい」と語る。青坂師が半生をかけて切り開いた江差追分の境地と普及に注がれた情熱は、師の人格とともに未踏の足跡として伝えられることでしょう。

青坂満上席師匠の
文化賞受賞 江差町で祝う
関係者二七〇人参加

十二月三日北海道文化賞と北海道新聞文化賞を受賞した青坂満上席師匠を祝う祝賀会が、江差町ホテルニューエッセいで開かれ、関係者二七〇人が、江差追分の普及伝承につくした功績を讃えた。

青坂師は妻ヨシエさんと、江差追分に打ち込んだ苦節の人生を紹介するナレーションで入場、開会の冒頭、潮がれた声いろいろで江差追分を熱唱、参加者に感動を与えた。

江差追分会長の濱谷一治町長が「師匠会会長など現役で活躍されている青坂さんは追分会の中心的存在。これからも追分会の指導に尽力してほ

しい」と祝辞を述べた。青坂師は「北海道で最も権威ある二つの賞を受賞感動している。富士山にたとえると自分はまだ八合目ぐらい、これからも研さんを積んで頂上をめざし、命ある限り追分につくします」と謙虚な言葉で謝辞を述べ会場に拍手が沸いた。
(取材・松村 隆)

江差追分人…青坂満の半生(仮題)
ノンフィクション
CD 江差追分唄がたり付
三月、北海道新聞社出版

鷗島の漁師の五男、満少年が、子どもごころに漁師の歌う追分に惹かれ、成人して追分を歌いはじめ、きびしい漁師生活の中で挫折と葛藤をくりかえしながら、江差の風土を歌い込んで「潮の匂う青坂節」の新境地を開いてゆく。青坂満が追分に賭けた生き様を、江差追分界の動きを背景に綴る書き下ろしのノンフィクション作品。松村隆の著作で北海道新聞から出版される。

- 対談・青坂満、木村香澄、著者
 - 写真グラフィア入り
 - 青坂満・CD「江差追分唄がたり」付録
- 平成十八年三月出版予定

事務局より

遅くなりましたが、新年明けましておめでとうございます。会員の皆様にはさぞ良い新年を迎えたことと思います。

本年も、江差追分の振興、発展のため努力してまいりますのでよろしくお願いいたします。

第二十一期追分セミナー

二月二日から二十五日まで、毎週木、金、土曜に開催されます。追分節の上達の近道。あなたも是非参加してみませんか。(なお、第三週の十六日～十八日は定員になりました)参加申込みは、追分会事務局まで。

「トピックス」

今年で二十一年になる追分セミナーですが、なんと今年の参加で二十回目を数える参加者がいます。追分に対する熱心な姿勢には頭が下がります。追分会としても感謝状等の贈呈を考えています。

資格取得希望者はお早めに

師匠、準師匠、講師、準講師の資格を取得希望している方は、三月一日までに関係書類を添えて事務局に提出してください。(なるべくお早めにお願ひします)

※資格審査認定委員会

平成十八年三月十二日(日)

江差追分会

十八年度事業計画表(予定)

○平成十八年度江差追分会

第一回理事会・総会

平成十八年四月二十三日

○平成十八年度第二回理事会

平成十八年七月十五日

○第四十四回江差追分全国大会

平成十八年九月十五日～十七日

○江差追分会師匠会研修会

第一回

平成十八年十月十四・十五日

第二回

平成十九年二月十八日

○江差追分会師匠会総会

平成十九年二月十八日

追分会館模様替え



全国大会第1回から43回目までのポスター(縮小版)を掲示



北前船の模型を役場から移設



今年は江差も例年になく大雪です

あとがき

□ 昨年の追分全国大会一般優勝は播磨孝雄さん(函館)、男性優勝は十年ぶり、しかも史上最高齢の六十二歳。熟年も少年組も男性の独占は珍しい。追分はきれいな声より人生を謳いあげる洪さがいい。男性族よガンバレ。

□ 男族の頂点にある青坂満上席師匠が、北海道で最も権威のある文化賞をダブル受賞の快挙に輝いた。民謡は趣味の世界という見方で、文化的評価は遅れ勝ちだったが、青坂師の追分人生が、北海道文化に先駆的な貢献をしたと高く評価された。師の素朴な人間性によるものであろう。

□ 高齢化で江差追分会のこれからが憂慮されているが、追分文化をどううけつづか、あり方が問われている。会員のみなさまよい年を迎えてください。

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 西谷和夫・中川 智

澤田博生